

建設工業新聞

個人の力を尊重し成長する時代に

千葉工業大学学長 小宮 一仁氏

シリーズ
国のかたちを
考える



〈こみや・かずひこ〉87年早大理工学部土木工学科卒。91年同大理工学部助手、92年同大大学院博士課程満期退学。94年千葉工大工学部助手、専任講師、助教授、ケンブリッジ大工学部専任助講師を経て、01年千葉工大工学部教授。12年6月第12代学長に就任。専門は土木工学、土質力学ほか。東京都出身。50歳。

学問の立場から見ると、科学と工学は相補的な関係にあるが、それぞれ探求しているものが異なる。自然界の真理を探究するのが科学。それに対して工学は、科学が見つけた真理をうまく使い人間にとって役に立つ価値を探索する学問だ。

技術者の役割も価値を生み出すことだといっている。例えば自然災害から人々の命と生活を守ることは大きな価値だ。災害が起きたとしても被害をできるだけ小さくする減災。これも大きな価値であり、こうしたことを力を発揮するのが技術者といえる。

技術者がこのことを常に意識して物事を進めていけば、人々の生活はどんどん良くなるだろう。

東日本震災では「想定外」のことが起きたといわれている。自然の力は計り知れないのであり、人間の「想定

には限界がある。大切なのは、想定できる範囲を常に客観的に検証することだ。想定できなかったら悪かったという点ではない。なぜ想定できなかったかを検証し、想定のための技術や精度を上げる。実際に起きたことを、今後の人間の営みに生かせば価値につながる。

グローバルな視点で たぐり寄せる

私たちが工学で土木を学んだころは、総合工学である土木は工学の「大先輩」だと習った。土木からいろいろな工学が分かれていったという歴史も踏まえての表現でもある。だが、近年は土木工学も細分化されてしまった。グローバル化が進んでいる中、例えば文科系的な分野や芸術的な分野も扱

っていくべきだとの意見もある。確かにそういう視点も重要ではあるが、実際、土木技術者や土木を学ぶ学生たちは、今そして将来一体何をすればいいかという具体的なことを、イメージできなくなっているのではないだろうか。

科学技術は日進月歩で、建設分野でも材料、工法、解析、設計技術などの高度化が進んでいる。そうした中で工学の細分化が進むのもまた当然といえる。細分化自体に問題があるのではない。

最適化された形で存在する今までになかった高度な技術も、人にとって最適な価値になるようにいかたたり

- 技術者は価値探求の役割を担え
 - 若者の身になって考え実践する
 - 改革進め優秀な人材を呼び込む
- 日本再生のポイント

寄せ、組み合わせ使っていくかが問われている。これがグローバルなものの考え方にはかならない。その役割を担っていくのが技術者だ。特に、自然界の厳しい環境に置かれる構造物を、さまざまな部材を使い、また大勢が協力して形づくると土木の世界では、その役割が技術者により強く求められている。

若者は将来を真剣に 考えている

子どもたちの理科離れが言われて久しい。由々しき問題だが、中長期的に見れば私はそれほど心配してはいない。若者は格好しいものに憧れて進路を選んでいる。その対象は時代とともに変わるもので、理科系が文科系よりも人気が高かったこともある。社会が理科系の人

間を大切にすれば子どもたちはすぐに反応するだろう。スパー・科学者や医師だけでなく、緑の下の技術者を欧米諸国並みに厚遇すればよい。国際的に見て日本人は理科系の競争に強い。経済だ。理科系に近い。理科系を伸ばすことは国にとっても合理的だと思

う。理科離れの問題は時代の変遷とともに解消されていくだろうが、待っているれば若者の目が建設業界に向くかといふとそうではない。われわれが思っている以上に若者は自身の将来を真剣に考え、人生設計をしている。だから具体的な仕事の内容やキャリアアップの仕組みが分からない職業には不安を感じる。本当の姿を知りたいと思う。そうした若者の声に耳を傾け、真剣に

なっていていかないといけない。

今後はこれまで以上に優秀な若者を確保するのが難しくなる。建設業界がそうした若者をどう呼び込むのか。業界のために頑張ろうとする気のある若者は全国にいる。彼らに具体的な仕事の内容を伝え、それがどのようにキャリアアップにつながっていくかを示せば、建設業界は若者に理解され得る。格好しいやりのある職業だと考える若者も増えるだろう。小手先の改革ではなく、若者の意識に合わせた取り組みを積極的に展開してほしい。

建設業界の魅力 高めるために

日本は今後、個人を尊重し個人の力を伸ばす国にならないといけない。海外では既に、優秀な個人を育て尊重し組織力の向上につなげるという発想に立っている。ところが、日本ではまだ組織の中の個人が見えにくい。これからは個人の力を基本に考えていくべき時代だ。

建設業界では若手社員の離職率が高まっていることが問題になっている。離職にはいろいろな理由があるのだろうが、会社の中で自分がどのような立場にいて役に立っているのかというところが見えない不安も一因ではないだろうか。若者は仕事で確かな自分の存在を感じたいのだ。護送船団方式も必ずしも悪いものではない。船団の原動力が個人の力であることを意識し「個人」にスポットが当たる取り組みを行えば、建設業界の魅力は高まっていくだろう。

個人を尊重し、個人の力を上げていくことで組織力を高める。それがこれからの「国のかたち」の基本でもある。それによって日本が世界の中で再び強い国になることを願っている。

(毎週月曜日掲載)